

# ハッシュタグ運動とは何だったのか

大森 智哉

(岡本 裕介ゼミ)

近年、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の普及に伴い、ハッシュタグ運動は新しい形の社会運動として注目を集めてきた。#BlackLivesMatter や #MeToo といったハッシュタグは、瞬時に大規模な支持を集め、社会問題への関心を喚起する手段となり、従来のオフライン活動とは異なる瞬発力や広がりを持つことが特徴である。これにより、情報の拡散や意識の喚起という点では効果的な手段となったが、その一方で、持続性や実効性に関しては疑問も浮上している。つまり、ハッシュタグ運動は社会的な影響を与える力を持ちながらも、その成果が長期的な変革につながるかどうかについては依然として不透明な部分が多い。本稿では、ハッシュタグ運動の経緯と影響を踏まえ、具体的な問題点と現状を考察する。特に、運動がどのように発展し、どのような課題に直面してきたのかを分析し、現代の社会運動におけるハッシュタグの位置づけを明らかにすることを目的とする。さらに、ハッシュタグ運動の限界に対して、どのような新たな運動形態が登場しているのかについても探求し、社会運動における今後の方向性を考察する。これにより、ハッシュタグ運動の意義と限界について深い理解を得ることを目指す。

## 1 ハッシュタグ運動の経緯

### 1-1 ハッシュタグ運動の定義

まず、ハッシュタグの定義について確認する。ハッシュタグとは、ソーシャルメディア上で特定のトピックやテーマを示すために、「#」記号を前につけた単語やフレーズを指す。ハッシュタグを使用することで、ユーザーは特定のテーマに関連する投稿を簡単に見つけたり、同じ話題についての会話に参加したりすることが可能になる。2007年にTwitterで初めて導入されて以来、ハッ

シュタグは情報の整理、検索、共有を容易にするための重要なツールとなっている（Twitter Japan 2022）。これにより、特定の問題に対する意見や情報が集約され、可視化されるようになった。

これを踏まえて、ハッシュタグ運動とは、ツイッターをはじめとするSNS上で「#（ハッシュタグ）」をつけて、意見を主張したり人々に議論をするよう呼びかけたりすることを指している（Kirigawa 2016）。この運動は、情報の迅速な拡散を可能にし、社会的な対話や運動の発信力を高める役割を果たしている。ハッシュタグの利用は、2010年代初頭のアラブの春など、さまざまな社会運動で特に顕著に見られた。ハッシュタグ運動の初期の事例として、まずアラブの春を見ておきたい。

### 1-2 ハッシュタグ運動の事例1——アラブの春

アラブの春とは、2010年12月にチュニジアで起きた民主化運動（ジャスミン革命）を発端として、北アフリカ・中東のアラブ諸国に波及した民主化要求運動を指す（末近浩太 2016; 世界雑学ノート編集部 2020; 馬場正裕 2024; 世界史の窓編集部; かうあい 2019）。この運動は、政治的抑圧や経済的困難、腐敗、社会的不平等に対する市民の不満が高まり、ソーシャルメディアを通じて広がった。#ArabSpring というハッシュタグは、この運動の象徴的な存在となり、各国で抗議活動や運動が広がる中で、SNS上で急速に拡散した。事件の発端は、チュニジア中部の都市で青果商の青年が野菜や果物を販売していたが、営業許可がなかったとして警察官に荷物を没収され、これに抗議するためにガソリンをかぶり、焼身自殺したことである。彼の焼身自殺はすぐにSNSにより国中に広まった。当時のチュニジアには問題があった。文化人類学者の鷹木恵子によれば、当時のチュニジアには以下のような問題が存在していた。

## ハッシュタグ運動とは何だったのか

チュニジアには“二つのチュニジア”といわれる地域間格差の問題がありました。観光開発も進む北部や沿岸部と、開発が遅れている南部や内陸部との経済格差です。また、若年層の失業率の高さも大きな問題でした。2011年の失業率は約18パーセント、なかでも若年層の失業率は約42パーセント、高学歴者の失業率は約29パーセントという高さでした。(久保田 2020)

当時のチュニジアでは、多くの若者が教育を受けたにもかかわらず、職を得られない状況が続いていた。これにより、地方での不満が高まり、社会的不安が募る要因となっていた。結果、このような状況に抗議するデモは、チュニジア全土に広がりを見せ、政府への強い不満が表面化した。青年の路上販売を厳しく取り締まった行政への抗議、長年続いていた失業率の高さや経済格差、大統領一族による富の独占などへの不満が爆発し、デモとなって革命へとつながったのだった(久保田 2020)。2011年1月、抗議活動は頂点に達し、ついにチュニジアの大統領が辞任し、サウジアラビアに亡命することとなった。その後、政権は崩壊した。この出来事は、アラブ諸国における民主化の第一歩とされ、他の国々でも同様の運動が起こるきっかけとなった。#ArabSpringというタグが広まり、SNSを通じて反政府の声が世界中に発信されるようになった。

さらに、この一連の出来事はアラブ諸国に拡大した。最初に影響を受けた国はエジプトであり、当時のエジプトのムバラク政権もチュニジアのベンアリ政権と同様に長期政権だった。ムバラクは1981年に大統領に就任し、約30年間にわたり政権を維持した。彼の政権は、経済の自由化や安定を謳っていたが、同時に腐敗や人権侵害、政治的抑圧が広がっていた。これらの要因が抗議活動を引き起こす背景となり、最終的には辞任に至ることになった。そして、ムバラク政権も崩壊した。

また、同年チュニジアの隣国であるリビアにもデモが発生していた。2011年初頭、チュニジアでの政権崩壊の影響を受けて、リビアでも抗議活動が始まった。最初のデモは、2月15日にベンガジで発生し、政府に対する腐敗や人権侵害、経

済問題への不満が高まった。このデモは、すぐに他の都市へと拡大し、リビア全土で反政府の声が高まった。カダフィ政権は、抗議活動に対して厳しい弾圧を行い、武力を用いてデモを鎮圧した。この暴力的な対応は、抗議者たちの怒りをさらに煽り、抵抗運動が武装化するきっかけとなった。反政府勢力は「国民評議会」を結成し、カダフィ政権に対抗するための組織的な運動を展開した。国際社会もこの状況を受けて注目し、リビアに対する経済制裁を課し、国連は人道的介入の決議を採択した。特に、2011年3月に始まったNATOの空爆作戦は、反政府勢力に対する支援を強化し、カダフィ政権に大きな打撃を与えた。抗議活動は続き、4月には反政府勢力がトリポリ近郊まで進撃したが、カダフィは依然として強硬姿勢を崩さず、激しい戦闘が続いた。しかし、国際的な支援を受けた反政府勢力は徐々に勢力を増し、9月にはトリポリを制圧した。カダフィは逃亡し、各地を転々としながら抵抗を続けたが、2011年10月20日、リビアのスルトで反政府勢力に捕らえられ、殺害された。カダフィの死は、リビアにおける内戦の終息を示すものであり、その後のリビアは新たな政治体制の構築に向けて動き出したが、依然として多くの課題を抱えることとなった。

そして、このような影響はイエメンにも起きた。イエメンでは、2011年1月に抗議活動が始まり、これは腐敗、失業、貧困などに対する不満が高まった結果であった。当時の大統領アリ・アブドラ・サレハに対する抗議が行われ、学生や市民が主要な都市でデモを展開した。抗議者たちは、民主化と政治改革を求めた。しかし、サレハ政権は強硬手段を取ることが多く、抗議活動はしばしば暴力的な衝突に発展した。2011年5月には、サレハは自らの支持基盤を失い、国外への逃亡を余儀なくされる状況に追い込まれた。6月には暗殺未遂事件が発生し、サレハは重傷を負った。その後、彼はサウジアラビアで治療を受けることとなった。国際社会の圧力や内部の混乱が続く中、2011年11月にはサレハがアラブ連盟の仲介により、権力移譲の合意に署名した。この合意に基づき、彼は2012年1月に辞任し、次期大統領選挙への移行が進められた。サレハの辞任後、イエメンは新たなリーダーシップの下での再建を試みたが、内

部の対立や分裂が続き、最終的にはさらなる混乱と内戦に突入していくこととなった。

チュニジア、エジプト、リビア、イエメンなどの長期独裁政権が崩壊したことは、世界に衝撃をもたらした。これらのほかに、バーレーンやヨルダンのように憲法改正される国もあった。このようにアラブの春とは、民主化を求める市民の声が広がり、長年の独裁政権に挑む重要な運動であった。特に、チュニジアやエジプトでは、SNSやハッシュタグを通じて情報が迅速に拡散され、広範な抗議活動が展開された。これにより、多くの人々が集まり、連帯を形成することが可能となった。

### 1-3 ハッシュタグ運動の事例2——BLM運動

次は #BlackLivesMatter (ブラック・ライブズ・マター。直訳すると「黒人の命は大切だ」。以下「BLM運動」) について取り上げる (Stephen 2016; Ethical Choice 編集部 2023; 馬場 2023; Black Lives Matter Global Network Foundation 2024; エレミニスト編集部 2024a)。BLM運動は、2013年にアフリカ系アメリカ人のトレイボン・マーティンがフロリダ州で白人の自警団員ジョージ・ジーママンに射殺された事件を契機に始まった。この事件は、アメリカにおける人種差別や警察の暴力に対する社会的な抗議を引き起こす重要な出来事となった。トレイボン・マーティンは、当時17歳の高校生であった。ジーママンは、彼が不審者であると判断し、警察に通報した後、自己防衛の名のもとにトレイボンを追跡し、最終的に射殺した。事件は全国的なメディアに取り上げられ、特に人種差別的な要素が強調された。ジーママンは後に無罪となり、これに対する怒りが高まり、多くの人々が抗議行動を起こすこととなった。この状況を受けて、アリシア・ガーザ、パトリッシュ・カレオ、オパール・トメティの三人は、「#BlackLivesMatter」というハッシュタグを作成し、SNSを通じて広めた。彼女たちは、アフリカ系アメリカ人の命が重要であるというメッセージを発信し、同様の事件が繰り返されることへの抗議を示した。運動は瞬間に広まり、2014年にはミズーリ州ファーガソンでのマイケル・ブラウン射殺事件が発生した。この事件もまた、警察による暴力の象徴として、多くの抗議活動を引き

起こした。また、8月にはファーガソンで白人警察に射殺される事件が起こった。ファーガソンでの抗議は、SNSを通じて全国に拡大し、デモ参加者は「Hands up, don't shoot (手を上げて、撃たないで)」というスローガンを掲げて、警察の暴力に抗議した。

2020年には、ジョージ・フロイドというアフリカ系アメリカ人男性がミネアポリスで白人警官デレク・ショービンにより殺害される事件が発生した。この事件は、BLM運動にさらなるインパクトを与え、全米各地で大規模な抗議運動を引き起こした。フロイドは、逮捕される際にショービンによって膝で首を押さえつけられ、約9分間にわたってその姿勢のままにされていた。この様子がスマートフォンで撮影され、SNSで広まると、多くの人々が激しい怒りを覚え、抗議行動に参加した。フロイドの死に対する抗議は、アメリカ国内のみならず、世界中に広がった。参加者は「Black Lives Matter」や「No Justice, No Peace (正義がなければ平和はない)」などのスローガンを掲げて街に繰り出し、制度的な人種差別や警察改革を求める声を上げた。例えば、ニューヨーク市では警察予算の一部を削減し、その資金を教育や社会サービスに振り向けることが決定された。また、ミネアポリス市では警察の監視制度を強化し、警察の行動をより透明にするための新しい規制が導入された。さらに、カリフォルニア州では、警察の暴力行為に対する監視を強化するための法案が可決され、警察官のボディカメラの使用が義務付けられた。この運動は、ただの抗議活動を超えて、社会的な議論や政策の変更を促す重要な機会となった。その後、各地で警察改革や人種平等に向けた政策の検討が行われ、一部の都市では警察予算の削減や新たな監視制度の導入が提案された。また、企業や団体もこの運動に賛同し、多くの組織が内部の人種問題を見直す契機となった。総じて、BLM運動は、単なるハッシュタグ以上の意味を持つ社会運動であり、アフリカ系アメリカ人の権利を求める重要な運動として、今もなお続いている。

この運動に対する理解を深めるためには、「BlackLivesMatter」の訳し方にも注目することが重要である。訳し方にはさまざまな解釈が存在

## ハッシュタグ運動とは何だったのか

する。一般的には「黒人の命が大切だ」という直訳が使われるが、「黒人の命も重要だ」や「黒人の命に価値がある」といったニュアンスの表現もある。これらの訳は、運動が伝えようとしているメッセージの重要性や背景を反映しており、単なる言葉以上の深い意味を持つことを示している。また、ジャーナリストの岩田太郎は現在の抗議行動の文脈からすれば、黒人参加者たちは『黒人の命こそ大切』と言っているニュアンスになる」(岩田 2020) としている。この運動の影響は、抗議行動だけでなく、政治的な政策や社会的な議論にも広がりを見せているのである。

## 1-4 ハッシュタグ運動の事例3——#MeToo

#MeToo 運動は、性暴力やセクシャルハラスメントの問題に対する社会的な意識を喚起し、被害者が声を上げる場を提供することを目的とした社会運動である(以下、me too 2024; エレミニスト編集部 2024b; 青島ほなみ 2021; フロントロウ編集部 2018; 前嶋和弘 2020)。この運動は、2006年にアメリカの活動家タラナ・パークによって始まった。パークは、性暴力の被害者、特に黒人女性を支援するために「Me Too」(私も経験した)というフレーズを使い、被害者の声を社会に届けるための活動を行った。しかし、この運動が広範に認知されるようになったのは、2017年にハリウッドの映画プロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインに対する性的暴行疑惑が報じられたことがきっかけである。ワインスタインに対する告発をきっかけに、数多くの有名人がSNS上で自らの性暴力被害を告白し、その中で「#MeToo」のハッシュタグが広まり、運動は急速に拡大した。この運動は、性暴力やセクシャルハラスメントが個人の問題ではなく、社会全体で解決すべき問題であることを強調し、世界中で広範な支持を得ることとなった。#MeToo 運動は、単なる告発の場を提供するだけでなく、性暴力やセクシャルハラスメントに対する法的・制度的な改革を促進する力を持つようになった。多くの国々や企業では、職場でのセクシャルハラスメント対策が強化され、性暴力に対する認識も改められた。

この運動が引き起こした社会的な反響は非常に大きく、特に法的・制度的改革が進み、セクシャ

ルハラスメント防止のための法規制やポリシーが強化された。性暴力に対する加害者の責任追及も強化され、アメリカでは「Time's Up」運動が立ち上がり、法的支援を提供するための基金が設立されるなど、具体的な制度改革が進んだ。Time's Up 運動とは「Time's Up (時間切れ)」、つまり「もう終わりにしよう」という意味であり、2018年にアメリカで始まった女性の権利向上と性的嫌がらせに反対する運動である(フロントロウ編集部 2018; 前嶋和弘 2020)。企業や団体にも強い影響を与え、特にエンターテインメント業界ではハリウッドの大物プロデューサーや監督が告発され、これにより多くの企業がセクシャルハラスメント対策を強化せざるを得なくなった。また、職場内でのハラスメント防止に向けた研修や相談窓口の設置が進められた。さらに、#MeToo 運動は性別に基づく権力構造や不平等に対する社会的な批判を高める結果となり、性暴力の加害者だけでなく、そのような行動を助長してきた社会全体に対する警鐘を鳴らすきっかけとなった。この運動は性暴力を許容しない社会づくりを目指し、ジェンダー平等の実現に向けた具体的な行動を促進した。

## 1-5 ハッシュタグ運動の事例4——#KuToo

KuToo 運動は、女性に対する高いヒールの強制を批判する社会運動であり、2019年に女優の石川優実さんが始めたものである。(聖心女子大学グローバル共生研究所 2022; 富田すみれ子 2020; 望月洋嗣 2020)。この運動の名前は、「靴」と「痛い(痛)」を組み合わせた造語で、女性が高いヒールを履くことによって生じる身体的な痛みや不快感を象徴している。日本において、企業や社会で女性に高いヒールを履くことが一種の「ドレスコード」として求められることが多く、そのことが身体的負担となっているという問題意識が強まった結果、KuToo 運動は生まれた。

運動のきっかけは、石川優実さんが自身のSNSで「#KuToo」というハッシュタグを使い、女性が高いヒールを履くことに対する抗議を行ったことだった。彼女は、高いヒールの着用が女性に身体的な負担や健康問題を引き起こす可能性があることを指摘し、またそれが社会的に不公平であると訴えた。KuToo 運動はSNSを通じて広がり、

多くの女性が自身の経験を共有することで、社会全体で問題意識が高まった。

KuToo 運動が注目を集めたことによって、企業や組織が女性社員に対する服装規定を見直すきっかけとなり、特に高いヒールを強制しない方針を採る企業も増えていった。例えば、全日本空輸や日本航空は KuToo 運動の影響を受け、女性社員に対する服装規定を見直し、ヒールの着用に関して柔軟な対応を取るようになった。また、社会における性別に基づく期待や規範に対する再評価が進み、女性が自身の身体を守りつつ快適に働ける環境を求める声が強まった。

## 2 問題点

### 2-1 アラブの春の場合

ハッシュタグ運動には問題点も存在する。まずはアラブの春の問題点についてまとめる（末近浩太 2016; 世界雑学ノート編集部 2020; 馬場正裕 2024; かうあい 2019）。アラブの春は世界各地に衝撃を与えた運動であったが、期待された変革はすぐには実現せず、各国において異なる結果が生じた。政権交代や改革が進んだ国もあれば、混乱や内戦が引き起こされた国もあり、これにより「アラブの冬」と呼ばれる状況が生まれた。この現象は、政治的安定や社会的発展を損なう結果をもたらした。例えば、アラブの春の象徴とも言えるチュニジアでは、2011 年にベンアリ政権が崩壊した後、民主化が進展した。選挙によって誕生した政府は自由な言論や政治活動を保障し、相対的に安定した状況を維持している。しかし、経済的困難や失業率の上昇は依然として深刻な問題であり、社会的不満が続いている。このような背景から、チュニジアの民主主義は必ずしも安泰ではなく、時折抗議活動が発生するなどの混乱も見られる。エジプトでは、2011 年にムバラク政権が崩壊した後、ムスリム同胞団が政権を握ったが、彼らの統治は不安定で、経済状況も悪化した。その結果、2013 年には軍によるクーデターが発生し、シシ大統領が権力を掌握した。シシ政権下では強権的な統治が行われ、政治的抑圧が強まった。民主主義の後退が懸念され、エジプト社会は再び閉塞感に包まれている。リビアでは、カダフィ政権が崩

壊した後、国家は混乱に陥り、武装勢力同士の争いが続いている。国は分裂状態にあり、中央政府の権威が薄れているため、治安は極めて悪化している。国際的な介入や和平プロセスが試みられているものの、リビアの将来は依然として不透明である。イエメンでは、アラブの春の影響を受けてサレハ政権が崩壊したが、その後の状況は一層悪化した。フーシ派によるクーデターが発生し、内戦が勃発した結果、国は人道的危機に直面している。食糧不足や医療崩壊が深刻な状況で、国際社会からの支援が求められているものの、和平交渉は難航している。アラブの春がもたらした初期の希望と理想は、権威主義的な政権の再強化や過激派の台頭を招くことになった。エジプトにおいては、ムスリム同胞団が政権を握ったものの、その後のクーデターによって軍事政権が復活し、民主的な進展は停滞した。さらに、経済的困難や人道的危機が深刻化し、地域全体に不安定さをもたらしている。このように、アラブの春からアラブの冬へと移行した過程には、単なる政治的変革の失敗だけでなく、社会的、経済的な要因が複雑に絡み合っていることが重要な問題点として挙げられる。アラブの春がもたらした変革の夢は、現実には多くの困難と課題を残す結果となったのである。

### 2-2 BLM運動の場合

BLM 運動の問題点について考察する。第一に、運動のメッセージの多様性が、統一性の欠如を引き起こしている。ハッシュタグ「#BlackLivesMatter」は、様々な問題を包括的に扱うため、多様な意見やアプローチが共存している。しかし、この多様性は時に運動の方向性を曖昧にし、外部からの理解を難しくする。特に、運動内での意見の対立や、異なるグループの間での利害の不一致が見られ、統一した戦略を持つことが困難となっている。第二に、ソーシャルメディアを通じた活動が、実際の社会変革に結びついていないという指摘がある。ハッシュタグ「#BlackLivesMatter」は、ツイッターやフェイスブックなどのプラットフォームを利用して迅速に拡大したが、これにより一時的な注目が集まる一方で、持続的な影響力を持つことが難しい場合があった。例えば、ハッシュタグがトレンド化することで一時的な関心を得ることは

## ハッシュタグ運動とは何だったのか

できるが、制度的な改革や政策変更に結びつく具体的な行動が不足しているという現実がある。第三に、運動のリーダーシップ構造に関する批判も存在する。BLM 運動は、特定のリーダーに依存しない分散型の運動であるため、時にリーダーシップの欠如が問題視される。明確な指導者がいないことで、戦略やメッセージの一貫性が欠け、運動の推進力が弱まる恐れがある。

以上のように、BLM 運動は多くの人々に希望を与える一方で、メッセージの多様性、オンライン活動の限界、リーダーシップ構造といった問題点を抱えている。これらの課題に対処することが、今後の運動のさらなる発展にとって重要である。

### 2-3 #MeToo や #KuToo の場合

#MeToo と #KuToo の問題点について考察する。『ELEMENIST』の記事によれば、以下の問題点がある。

一例として、虚偽の告発が行われるリスクがある。SNS は匿名性が高いため、無実の人が社会的に制裁を受ける可能性がある。また被害者が声を上げることで、再びトラウマを受ける二次被害も懸念される。さらに運動が過熱することで、すべての男性が疑われる風潮が生まれ、性別間の対立が深まることも考えられる。企業や組織内での適切な対応が求められるなかで、具体的なガイドラインや支援体制を整備する必要がうまれる。(エレミニスト編集部 2024b)

また、このほかにも #MeToo の影響を受け、男性が女性を避けるような状況も考えられる。男性が女性を避けるような状況が生まれると、職場や社会での交流が一層希薄になり、性別に基づく誤解や偏見が強まる可能性がある。例えば、男性が女性との業務上の接触を避けることで、女性が重要なプロジェクトから外されるなど、キャリアや機会に不平等が生じることがある。さらに、このような避ける態度が広がると、性別間の信頼関係が損なわれ、共に働く環境が悪化する恐れもある。結果として、男女平等が進展するどころか、逆にギャップが広がることになりかねない。これらの

問題点を踏まえ、#MeToo 運動の意義を理解しつつ、社会全体での意識改革と適切な対応が求められる。

#KuToo にも問題点が存在している。その一つが、多様な意見の存在である。たとえば、ハイヒールを好んで履く女性もいるのに、この運動が一律にハイヒールを否定しているように見えることがある。また、#KuToo はジェンダー平等の問題として捉えられることが多いが、職場の文化や慣習などさまざまな要因が絡んでおり、解決が難しい側面もある。

これらの問題に対して、どのように向き合うべきかを考えることが重要である。まず、多様な意見を尊重する姿勢が必要である。ハイヒールを好んで履く女性の意見も尊重しつつ、強制されることなく選択の自由が保障されるべきである。次に、職場の文化や慣習を見直すことが求められる。ドレスコードがジェンダーに基づく不平等を助長していないかを再検討し、必要に応じて改訂することが重要である。最後に、法的な枠組みの整備も考慮すべきである。ジェンダー平等を推進するための法律や規制を強化し、違反があった場合には適切な措置が取られるようにすることが求められる。これらの取り組みを通じて、#KuToo 運動が目指す選択の自由と平等な職場環境の実現に近づくことができると考えられる。

### 2-4 問題点のまとめ

以上のように、ハッシュタグ運動はメッセージの多様性、オンライン活動の限界、持続力の欠如、リーダーシップ構造の問題といった複数の課題を抱えている。これらの課題に対処することが、今後の運動がより効果的に機能するための重要なステップとなるだろう。

## 3 ハッシュタグ運動の現在の姿

最近では、SNS 上で影響力を持つインフルエンサーや著名人が社会的・政治的問題について発信し、その影響力で世論を動かすケースが増加している。インフルエンサーや著名人が特定の業界における権利問題にも積極的に声を上げるようになっており、特に AI 技術の発展に伴い、クリエ

イティブ業界では著作権や倫理的な問題が浮き彫りになっている。その一例が、声優業界でのAIに対する抗議活動である。声優の音声データや演技が無断で生成されることに対して、業界内外から強い反発の声が上がっており、その例が「#NOMORE 無断生成 AI」という運動である（『NOMORE 無断生成 AI』声優有志の会 2024; ITmedia 2024）。この運動は、無断でAIが声優の音声を模倣し、商業利用されることに対する警鐘を鳴らすもので、特に声優やクリエイターの権利保護を求める意図が込められている。この問題は、AI技術の進化が加速する中で声優たちは自らの職業の存続を懸けて立ち上がることを余儀なくされている。「NOMORE 無断生成 AI」の運動はSNSを通じて広まり、業界の内外における大きな議論を巻き起こした。声優自身がSNSで発信し、フォロワーを巻き込んで問題提起をする形で、社会的な関心を集めることに成功している。このような運動は、SNS上でのインフルエンサーとしての役割を強調し、特定の業界における倫理的な問題に対しても影響力を持つ存在として、ハッシュタグ運動の新たな形を提示している。また、この運動は業界のガイドラインや規制の見直しを求める声を高めており、AI技術が社会に与える影響について再考させる契機ともなっている。インフルエンサーや著名人がこうした問題に対して声を上げることは、今後のハッシュタグ運動の方向性を示す一例であり、SNSを利用した社会的影響力の拡大を象徴する動きである。

さらに、ハッシュタグ運動には持続性の欠如やリーダーシップ構造の問題点があったが、この問題に対して対策を講じている運動も存在する。その一例が「#Fridays For Future」である。（Fridays For Future Japan 2024; Portillo 2024）。Fridays For Futureは、気候変動に対する意識を高めるために、特に若者を中心に世界中で広がっている。グレタ・トゥーンベリが2018年にスウェーデンで始めた「学校ストライキ」から始まり、現在では100か国以上で実施される国際的な運動となっている。この運動の最大の特徴は、グレタ・トゥーンベリという象徴的なリーダーがいる一方で、各国の参加者が自発的に活動を展開している点である。これは分散型の運動として、リーダーシップ

の問題を克服し、各国の具体的な気候政策に影響を与えることを目指している。特に金曜日に行われる「金曜日のストライキ」やデモ活動は、若者たちの連帯感を強め、定期的に開催されることで運動の持続的な影響力を維持している。また、グレタ自身も国際的な舞台で政策変更を求める発言を繰り返し、各国政府に対して気候対策を急ぐよう強い圧力をかけている。このように、Fridays For Futureは単なるオンライン活動にとどまらず、実際の社会変革を追求し、気候変動問題に対するグローバルな意識を高め続けている。

## 4 結論

本稿では、SNSを活用したハッシュタグ運動が現代社会において果たす役割とその影響を分析し、その限界についても考察してきた。#BlackLivesMatterや#MeTooなどの運動は、瞬時に広範な支持を集め、社会的な問題に対する意識を高める力を持つ一方で、運動の持続性や実効性に関しては依然として課題が残ることが明らかとなった。特に、これらの運動が長期的な社会変革に結びつくかどうかについては、SNSを通じた短期的な関心喚起にとどまる場合が多く、実際の政策変更や社会構造の変革に至るまでには多くの障害が存在する。

一方で、近年では、ハッシュタグ運動から一歩進んだ形で、具体的な行動や実施計画を伴う社会運動が登場しており、オンラインとオフラインの活動が密接に連携する動きが強化されている。例えば、インフルエンサーや著名人が声を上げ、直接的な行動を伴う運動が増えてきており、これにより社会問題への認知度や関心をさらに深めるとともに、より持続的な変革が可能となる兆しも見えてきた。

また、2024年12月7日にアサド政権が崩壊した際にも、かつてのハッシュタグ運動が情報拡散と国際的な関心を高める役割を果たした可能性がある。この出来事は、シリア国内外でのハッシュタグを用いた情報拡散と国際的な連帯の力を示しており、ハッシュタグ運動が単なるデジタル上の現象に留まらず、現実世界での変革に影響を与える可能性を示唆している。

## ハッシュタグ運動とは何だったのか

総じて、ハッシュタグ運動はその短期的な効果と即時的な影響力を持つ一方で、長期的な社会変革には限界があることがわかった。しかし、これらの運動が社会的意識を高め、議論を喚起する手段として重要であることは間違いない。今後、ハッシュタグ運動が社会運動の中で果たす役割は、単なる情報拡散にとどまらず、現実的な変革に向けた具体的な行動へと進化することが求められるだろう。これにより、SNSを活用した運動が持つ潜在的な力を最大化し、持続可能な社会変革を実現する方向性が見えてくることを期待したい。

## 参考文献リスト

- 青島ほなみ, 2021, 「#MeToo 運動とは？きっかけ、日本や韓国での動きについても解説！」, 『なるほどSDGs』(2021年4月13日), (2024年12月13日取得, [https://naruhodosdgs.jp/metoo\\_gender/](https://naruhodosdgs.jp/metoo_gender/)).
- 馬場正裕, 2023, 「BLM 運動とは？きっかけや影響、現状をわかりやすく解説！」, 『Spaceship Earth』(2023年12月27日), (2024年11月30日取得, <https://spaceshipearth.jp/black-livesmatter/>).
- , 2024, 「アラブの春とは？なぜ起きたのかと失敗した原因・日本を含めた各国の動向をわかりやすく解説」, 『Spaceship Earth』(2024年11月11日), (2024年12月15日取得, <https://spaceshipearth.jp/arab-spring/>).
- Black Lives Matter Global Network Foundation, 2024, “About Black Lives Matter”, Black Lives Matter, (Retrieved November 21, 2024, <https://blacklivesmatter.com/about/>).
- エレミニスト編集部, 2024a, 「BLM 運動とは 発端となった事件や歴史、世の中に与えた影響を解説」, 『ELEMENIST』(2024年7月19日), (2024年11月30日取得, <https://elemenist.com/article/3559>).
- , 2024b, 「#MeToo 運動とは？意味ときっかけ、日本社会にもたらした影響は」, 『ELEMENIST』(2024年7月24日), (2024年12月13日取得, <https://elemenist.com/article/3566>).
- Ethical Choice 編集部, 2023, 「Black Lives Matter (BLM 運動) とは？反黒人差別の歴史と社会への影響」, 『Ethical Choice』(2023年9月8日), (2024年11月30日取得, <https://exidea.co.jp/ethicalchoice/journal/sustainable/black-lives-matter/>).
- Fridays For Future Japan, 2024, 「Fridays For Future 未来のための金曜日とは」, 『Fridays For Future Japan』, (2024年12月12日取得, <https://fridaysforfuture.jp/aboutus/>).
- フロントロウ編集部, 2018, 「『Me Too』に続く運動『Time's Up』—ゴールデン・グローブ賞で男性セレブたちも支持を表明」, 『FRONTROW』(2018年1月8日), (2024年12月13日取得, [https://front-row.jp/\\_ct/17140876](https://front-row.jp/_ct/17140876)).
- ITmedia, 2024, 「声優が呼び掛ける『NOMORE 無断生成 AI』第1弾の動画と公式サイトを公開」, 『ITmedia AI +』, (2024年12月12日取得, <https://www.itmedia.co.jp/aipplus/articles/2410/22/news131.html>).
- 岩田太郎, 2020, 「『黒人の命も大切』ではなく『黒人の命こそ大切』」, 『Japan In-Depth』(2020年6月4日), (2024年11月20日取得, <https://japan-indepth.jp/?p=52264>).
- かうあい, 2019, 「アラブの春とは、その後の経緯と状況、及び周辺諸国への影響について！」, 『世界の出来事』(2019年6月18日), (2024年12月15日取得, <https://weldone.tokyo/about-the-arab-spring/>).
- Kirigawa, Shiori, 2016, 「世界を変える『ハッシュタグ・ジェネレーション』」, 『NEUT Magazine』(2016年9月9日), (2024年11月5日取得, <https://neutmagazine.com/hashtag-generation-changes-the-world>).
- 久保田真理, 2020, 「民主化移行を果たしたチュニジア」, 『mundi』87:12-15, (2024年11月5日取得, [https://www.jica.go.jp/Resource/publication/mundi/202012/202012\\_04.html](https://www.jica.go.jp/Resource/publication/mundi/202012/202012_04.html)).
- 前嶋和弘, 2020, 「女性議員の数を増やすことがなぜ重要なのか？“TIME'S UP”【4つのキーワードからひも解くアメリカ】」, 『ENGLISH JOURNAL』(2020年10月6日), (2024年12月13日取得, <https://ej.alc.co.jp/tag/>).



- CULTURE/20201006-ej-america-now-02).
- me too, 2024, "This Is The Work", Me Too Movement, (Retrieved November 21, 2024, <https://metoomvmt.org/the-work/>).
- 望月洋嗣, 2020, 「始まりは素朴な疑問 世界に伝わった『#KuToo』 石川優実の問いかけ」, 『朝日新聞 GLOBE +』 (2020 年 3 月 8 日), (2024 年 12 月 13 日取得, <https://globe.asahi.com/article/13191889>).
- 『NOMORE 無断生成 AI』 声優有志の会, 2024, 「statement」, 『NOMORE 無断生成 AI』 (2024 年 10 月 21 日), (2024 年 12 月 12 日取得, <https://nomore-mudan.com/#statement>).
- Portillo, Germán, 2024, 「Fridays for Future: 気候変動に対する世界的な闘い」, 『Renovables Verdes』 (2024 年 10 月 13 日), (2024 年 12 月 12 日取得, <https://ja.renovablesverdes.com/%E6%9C%AA%E6%9D%A5%E3%81%AE%E9%87%91%E6%9B%9C%E6%97%A5/>).
- 聖心女子大学グローバル共生研究所, 2022, 「#KuToo—選択可能な未来へ」, 『聖心女子大学グローバル共生研究所』 (2022 年), (2024 年 12 月 13 日取得, [https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/exhibition/2022\\_women\\_3/chapter\\_03/](https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/exhibition/2022_women_3/chapter_03/)).
- 世界史の窓編集部, 「アラブの春」, 『世界史の窓』, (2024 年 12 月 15 日取得, <https://www.y-history.net/appendix/wh1703-121.html>).
- 世界雑学ノート編集部, 2020, 「アラブの春とは？原因や失敗からエジプトやチュニジアのその後まで」, 『世界雑学ノート』 (2022 年 3 月 1 日), (2024 年 12 月 15 日取得, <https://world-note.com/arab-spring/>).
- Stephen, Bijan, 2016, 「ブラックパワーと公権力——ソーシャルメディアによる新たな闘争」, 『WIRED』 (2016 年 7 月 15 日), (2024 年 11 月 30 日取得, <https://wired.jp/special/2016/black-lives-matter/>).
- 末近浩太, 2016, 「アラブの春とは何だったのか？～革命の希望はこうして『絶望』に変わった」, 『現代ビジネス』 (2016 年 2 月 26 日), (2024 年 12 月 15 日取得, <https://gendaimedia/articles/-/47972>).
- 富田すみれ子, 2020, 「日本航空がヒール着用規定を『廃止』へ #KuToo が始まって 1 年余、思い届く」, 『BuzzFeed Japan』 (2020 年 3 月 23 日), (2024 年 12 月 13 日取得, <https://www.buzzfeed.com/jp/sumirekotomita/jal-kutoo>).
- Twitter Japan, 2022, 「15 年前ハッシュタグは Twitter から生まれました」, 『X ブログ』 (2022 年 8 月 23 日), (2024 年 11 月 16 日取得, [https://blog.x.com/ja\\_jp/topics/events/2022/hashtagday](https://blog.x.com/ja_jp/topics/events/2022/hashtagday)).